

降り立てばぎりりと暑し亀の井バス「血の池地獄前」停留所 大口玲子

別府温泉である。亀の井バスにはじっさいに「血の池地獄前」というバス停がある。「ぎりり」がうまい。インパクトのある不思議な停留所の名前をいかして、一首にしあげたアイディア。

印刷機がっしやんがっしやん回る度甘く小暗くインク匂いぬ 倉石理恵

一連の作によれば、子供時代に印刷所を経営していた叔父の工場の思い出らしい。最後が完了の「ぬ」で止められているのはそのため。活版印刷の機械独特の音、そしてインクの匂い。「甘く小暗く」に工夫を読む。

六年と六月列車を待ち続け願い叶いし伊勢奥津駅 青山仁

鉄道好き、いわゆる「乗り鉄」の作者ならではの、マニアックな一首。一首の背景をなす事情は、以下の通り。伊勢奥津駅はJR東海の名松線（松坂駅→伊勢奥津駅）の駅（松坂・名張間を走る予定でこの名前がつけられた）。二〇〇九年十月の台風被害のため名松線全線が運休となった。その後一部のみ復旧。松坂駅・伊勢奥津駅が完全復旧するまで六年半かかったという。微細にわたる事情をあえてうたった点が独特。駅が待ちに待っていたとする表現が見どころ。

暗闇坂を上ると真言広福寺 母逝きて四十五年 父 三十一年 晋樹隆彦

川崎市多摩区の広福寺である。作者のご両親が埋葬さ

短歌の現在

No.427 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

れているのだろう。名詞と動詞だけで、自分史の重大事に光を当ててみせた。

宙吊りの非常階段にんげんを救ふ装置のにんげんを待つ 塩川郁子

非時階段が待つのは非常時である。無いほうがいい非常時。安全のために危険な宙ぶりの状態で待つ非常階段。あらためて考えてみれば、不思議な存在である。

胴体をまるごと震わせ泣いている兄弟ヴィオラとバ
イオリンのごと 奥村知世

「……泣いている兄弟」で切れる。つまり第四句が「兄弟、ヴィオラと……」と句割れになっているわけである。年齢の近い幼児二人が泣いている比喩として、二つの楽器をもってきたアイディアは卓抜。細かいことだが、「ヴィオラ」と表記するならば「ヴァイオリン」とすべきだろう。

アイヌの血継ぎたる女のムツクリのびんびゅんとわが心にひびく 小林優子

第四句「びんびゅんと」が掛詞的な働きをしている点に注目した。上からは、ムツクリ（アイヌ民族に伝わる竹製の楽器）が、びんびゅんという音を出すというつづき、下へはびんびゅんとひびくの意味で展開している。

気合掛からぬ糖尿A食 米粒を数えて食らう我が反抗期 加賀谷実

一連によれば脳の手術のため、まず糖尿病治療をとることで食事制限をされている場面。つらい我慢をユーモアの味つけで表現している点が見どころ。初句がうまい。